

令和8年2月2日

「長野原町文化財保存活用地域計画（案）」にかかるパブリックコメントの実施結果

1. 募集期間

令和7年12月17日（水）～令和8年1月25日（日）

2. 募集の方法

①直接提出 ②郵送 ③FAX ④電子メール

3. 募集結果

提出者：1名 提出方法：直接提出1名

4. 意見の内訳（概要）

項 目	件数	意見
全体	1	意見①
第1章 長野原町の概要	1	意見②
第2章 長野原町の文化財の概要	1	意見③
第3章 長野原町の歴史文化の特性	0	—
第4章 文化財に関する既往の把握調査	0	—
第5章 文化財の保存・活用に関する将来像	0	—
第6章 文化財の保存・活用に関する課題・方針	0	—
第7章 文化財の保存・活用に関する措置	0	—
第8章 関連文化財群	1	意見③ 意見④
第9章 文化財の保存・活用に関する推進体制	0	—

該当箇所	全体
意見①	<p>【提案の趣旨】本町の現在の平和な文化的景観（浅間山北麓・六里ヶ原など）は、戦後の「全土基地化」の波に抗い、科学的論理と先人の判断によって勝ち取られたものです。素案に記された戦時遺産と戦後開拓史を「演習地反対運動」という一本の線で繋ぎ、本町独自の歴史的アイデンティティとして明記することを提案します。</p> <p>1. 提案内容（各章への反映イメージ） （意見②、③、④）</p> <p>2. 提案理由</p> <p>①歴史の連続性の解明：戦前の軍事施設があったからこそ、戦後に他自治体から「最適地」として差し出されたという因果関係を記述することで、負の歴史を平和への意志で断ち切った本町の歩みが明確になります。②自然と学術の力：「噴火（自然）」が演習を阻み、「科学的論理（学術）」が政治的圧力を退けたという構図は、長野原町が掲げる「火山と共生」というテーマと合致します。③誇りの醸成：「目先の利益」か「未来の土地」かという究極の選択を乗り越えて守り抜かれた現在の景観は、先人が勝ち取った平和の成果です。</p>
町の考え方	<p>3 歴史的背景</p> <p>p. 40 【浅間高原の開拓と発展】13行目と14行目の間に段落を作り、下記のとおり、追記します。</p> <p>「昭和27年（1952）には、戦時中に設置された陸海軍の軍事施設の影響で、本町と嬭恋村に跨る六里ヶ原（本町部分は北軽井沢地区）が米軍の演習地として誘致される危機がありましたが、昭和28年（1953）に当時の町長の萩原恭次が拒絶したために、北軽井沢地区が米軍演習地となることはありませんでした。」</p> <p>なお、当件に関する文化財の把握が進んでいないため、計画策定後の事業遂行・調査に合わせて、計画の変更が必要であるか検討します。</p>

該当箇所	第1章 長野原町の概要
意見②	<p>①戦前・戦中の軍事實績が引き金となった「全土基地化」の危機</p> <p>1950年代初頭、冷戦の激化（朝鮮戦争等）を背景に、米国の軍事戦略に基づく「全土基地化」が全国で進行していました。この潮流の中、1952年2月、隣接する軽井沢町の佐藤町長らが外務省へ提出した陳情書の中で、長野原町の「六里ヶ原」が「演習地として最適」と勝手に推奨されていた事実を記述してください。陳情書には「附近には既に連合軍に依る小型発着用の飛行場もあり」との記述があり、これは素案にある旧陸軍浅間演習場東廠舎や旧海軍のロケット実験等の実績を、戦後の米軍誘致の根拠として再利用しようとしたものです。過去の負の遺産が危機の呼び水となった事実は、本町の土地利用史において特筆すべき事項です。</p>
町の考え方	意見①の町の考え方のとおり、p. 40に記述を追記します。

該当箇所	第2章 長野原町の文化財の概要
意見③	<p>②噴火の脅威と地質遺産「熔岩樹形」の死守</p> <p>1953年の計画浮上時、浅間山は極めて活発な活動期にあり、頻繁に噴火を繰り返していました。当時の住民の間では、この度重なる噴火の脅威こそが、米軍や保安隊を撤退へ向かわせた実利的な要因の一つであったと語り継がれています。また、演習地化は、現在のジオパークの核心である国の特別天然記念物「浅間山溶岩樹型」を埋没・破壊する危機でもありました。</p>
町の考え方	意見①のとおり、p. 40に記述を追記します。「浅間山溶岩樹型」は、嬭恋村域であり、本章は関連制度である浅間山北麓ジオパークの紹介であるため、修正しません。

該当箇所	第8章 関連文化財群
意見④	<p>③地域内の葛藤：「キャラメル」の論理と町長の判断</p> <p>1953年、萩原（恭次）長野原町長が「農民のためにならない」と借地を毅然として拒絶した際、町内は決して一枚岩ではありませんでした。戦後の困窮した経済状況下で、地元の有力者（ボス層）や地主からは、「キャラメル一つ売っても町のためになるのに、町長が独断で断るとは何事だ」と、わずかな経済的可能性も追求すべきとする立場から猛烈な突き上げがなされました。町長が「今後はよく相談する」と謝罪に追い込まれるほどの激しい対立がありながらも、最終的に「土地こそ命」とする開拓農民の生存権と学術的価値が優先されたプロセスこそが、現在の文化的景観の価値を支える人間ドラマとして記録されるべきです。</p>
町の考え方	『長野原町誌』に記述されておらず、かつ庁内にて本件資料の収集・文化財の把握が進んでいないため、計画策定後の事業遂行の中で、関連文化財群②として追加すべき文化財があるかどうか検討を進めることとします。そのため、本文では修正しません。